

年間第三十主日

2010.10.24

(ルカ 18・9-14)

今日の福音でイエスさまは、祈るために神殿に上った二人の人の姿を通して、祈るとはどのようなことかを教えておられます。二人の人がそれぞれ心の中でどのような祈りをしたかを述べた後で、イエスさまは驚くべきことを語っておられます。それは、今日の福音の最後の14節に記されたおことばですが、そこで、イエスさまは次のように言われます。「言うておくが、義とされて家に帰ったのは、この人（つまり、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら『神さま、罪人の私を憐れんでください』と祈った徴税人）であって、あのファリサイ派の人ではない。」「言うておくが」という出だしのおことばが耳に残ります。「言うておくが」というのは、「わたしは言うが」ということです。イエスさまはどのような祈りが神さまに受け入れられ、どのような祈りがそうではないかと言われているのです。それも、しばしば夜を徹して祈られるほどの、祈りにおける父なる神との深い交わりの経験の中から、祈りとは何であるかを熟知しておられるお方として、イエスさまはここで祈りについて語っておられるのです。今日私たちはそのようなイエスさまのみ前に身を置いて、あらためて祈りについて教えを乞いたいと思います。

イエスさまのおことば聴いて、どのように祈るべきかを教えていただくためには、まずイエスさまのおことばに注意深く耳を傾けなければなりません。イエスさまのお話に出てきた二人の人は、二人とも「神さま」と呼びかけて祈っています。私たちもことばには出さなくても、祈るときには「神さま」とか、「主よ」とかの呼びかけをもって、あるいは聖母マリア様や聖人方の取次ぎを願って祈っています。二人の人が祈るために神殿に上ったように、神さまのみまえに身を置いていることを意識して祈っています。イエスさまが教えてくださる祈りとはまずはそのようなことです。けれども、イエスさまの時代のユダヤの人々とはちがって、現代の日本の社会の中に生きる私たちには、そのことさえも多くの場合難しいことかもしれません。日々の生活の中で、私たちの心から「神さま」とか「主よ」という叫びが湧き起こって来ないとするなら、私たちはカトリック信者であっても、神さまとの関係を自分の中に維持できなくなってしまいます。そのような生活状況の中から私たちが神さまに向かって、「神さま」と叫ぶとしたら、私たちが置かれているこのような困難な状況を神さまに訴える叫びとなるのではないかと思います。そしてそのような状況に気づく時、私たちの祈りは、周囲の状況に飲み込まれて生きざるをえないことによって、自分の中の神さまとの

交わりが希薄なものになってしまっていることへの、罪の意識を伴う渴きを訴える叫びとなるのではないのでしょうか。私たちの祈りがこのような叫びとなることを願いたいと思います。そしてあの徴税人の祈りを受け入れ、彼を義としてくださった神さまが、私たちのこのような心からの叫びとしての祈りを受け入れて、私たちをも義としてくださることを願い求めたいと思います。イエスさまのおことばに導かれつつこのように考えるなら、私たちの置かれている状況は、あのファリサイ派の人のそれより、徴税人の立場に近いことが分かってきます。そして、あの二人のうち神さまは徴税人の祈りを受け入れてくださり、彼を義としてくださったと語られるイエス様の教えが私たちにとってこれ以上なくありがたいものと思えて来ます。そのようにして、イエスさまは私たちをも神さまのとの親しい交わりに招き入れようとしていてくださるのです。義とされるということは、義そのものである神さまの義に与らせていただき、神さまとの親しい交わりを回復していただくということだからです。

今日のお話の中で、どうしてイエスさまは二人の人の祈りを比較して、神さまによって義としていただけた、つまり、その祈りが神さまのもとにまで届き、聴き入れていただけたのは徴税人の方であって、ファリサイ派の人の祈りはそうはならなかったと言っておられるのでしょうか。ファリサイ派の人の祈りも立派な感謝の祈りです。自分が神さまのために出来ていることをファリサイ派の人は神さまに感謝しているのです。けれども、私たちの祈りを聴いてくださる神さまは、人間が見るように一人ひとりの人の心をご覧になるのではないということイエスさまは言っておられるのではないのでしょうか。神さまのみまえに祈るとき、私たちは人の心のありようを見通しておられる神さまのみまえで祈っているのです。祈りにおいて私たちは私たちが信じている神さまと真実相対しているのです。祈りは私たちの信仰の生きた姿です。そのような姿を神さまはご覧になってくださると言ってもよいかもしれません。ファリサイ派の人は自分が神さまのためと思ってしていることを数え上げることによって、知らず知らずのうちに私たちの中にも忍び込んでいる、人間の世界の優劣の価値基準から抜け出すことのないままに祈っているのです。それゆえに、この人は神さまに祈りをささげた後も、その価値基準から抜け出すことはないのです。あの徴税人のようには神さまによって義とされることはなく、したがって、彼がささげた祈りによって、何一つ変えられることはなく、人々の目から見れば敬虔なファリサイ派の人として生き続けたことでしょう。そして彼はそのことに満足しきっていたことでしょう。けれども、イエスさまに教えていただいた私たちはそのようなファリサイ派の人の神さまのみ前での姿がいかにも恐ろしいものであるかに気づかなくてはなりません。

祈りにおいて私たちは真実神さまと出会うのです。そして、私たちの祈りが真

実魂の叫びとなっているなら、私たちもあの徴税人のように神さまによって義としていただけるのです。神さまの義とはどのようなものであるかを語る今日の福音の最後のおことばに耳を澄ませたいと思います。「誰でも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」。この今日の福音の最後のおことばは、私たちにマリアさまが歌ったマニフィカト賛歌を思い起こさせます。その賛歌の中でマリアさまは、神さまがご自分になさってくださったことを次のように歌っておられます。「神は卑しいはしためを顧みられ、何時の世の人もわたしを幸せなものと呼ぶ。神はわたしに偉大な業を行われた。その名はとうとく、あわれみは代々、神を恐れ敬う人の上に。」さらに続けて次のように歌われます。「神はその力を現し、思い上がるものを打ち砕き、権力をふるうものをその座から降ろし、見捨てられた人を高められる。飢えに苦しむ人はよいもので満たされ、おごり暮らすものはむなしくなって帰る。」ここには旧約以来の神の義、義そのものである神さまのなさり方が歌われています。そのマニフィカトの最初のことばを思い出したいと思います。マリアさまはその神の義に与った喜びを「わたしは神をあがめ、わたしの心は神の救いに喜び踊る」と歌っておられるのです。神さまによって真実義としていただくことが出来た人々は皆、マリアさまとともにこのマニフィカトの歌を歌うことが出来るのです。私たちもそのような神さまへの賛歌の輪に加えていただくことが出来るよう、マリアさまの取次ぎを願って、あの徴税人と肩を並べて、心の底から神さまの憐れみを求めて祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高